



門下留 2
種 359
卷

門下 2
1619

門下 2
1884



文部省 差出控

○ 藩內學事諸制度

○ 長政公世子及執政三命之

○ 告諭書

○ 齊清公少初年際是臣了

○ 重臣三告諭書

○ 東西兩學館揭示文

○ 士族在子弟教育方法

○ 平民子弟教育方法

○ 家塾寺子屋設置制度

○ 學子校名稱

○ 校舍所在地名

○ 沿革要畧

○ 學校設立畫力七三學子士小傳

○ 修祿館學規

○ 甘棠館學規

其他

○ 先儒姓名錄

○ 益軒先生墓碑銘

○ 日夫人東軒日

○ 山口豐

○ 戶次昆 小傳

藩内學事上ノ諸制度

布令諭達類ハ廢藩ノ時散失シテ完カラス今存
スル者ヲ左ニ録ス○學業上進ノ者ニ加役米又
引米等ノ法ナシ○カ學ノ生徒ハ師負其上進セ
ント見レハ藩廳ニ告テ職ニ就ヲ免除シ或ハ學
費ヲ給スルハアリ

藩祖筑前守長政元和八年九月世子ト執政ニ令

シテ云

一國成多もの主將ハ格別の思慮なく
してハ叶いかく九人と同く桂ハ心得
ゆるく先赤身ヲ行儀作法と正しく
志テ政道ハれ曲なく善民と撫育を勉
め又我平日好む事ヲ慎み操ふハ主
君の好む事ハ諸士と好む百姓所人まで
も玩ふものなれハ後初の懐き遊具たり
と目よるものなれハ四民の手平と
なる事一時も忘るゆるく九國主を
常々仁愛に於て徳と信せし善哉行ふ
と以て整くを勉め政事ハ青天白日の
光とく以白にして深く思案をめぐらし
一ましらやまのゆるく文武ハ車の両輪の
かくまれのゆるくかけてハ多かりし勿
論治世ハ文を用い亂世ハ文ヲ捨さるハ
必要あるア世治りて國主たる人武
ヲ忘れ時ハ亦一軍法をめぐり家中の
諸士ハおのづから心柔弱よなり武道の
ゆるくまらば武藝ハ急ぎ武具ハ不
不足し持付ハるハ武具もさしとせりて

依り用ふるもどきむく武道おぼゆるるるんは
平生の軍法定まりどきむく不慮の兵乱出
まらぬる時にいひてて廢き評定調ひ候
軍法立のこゝ武將の家も生れての暫し
し武技忘るころは又乱世の文と捨りし
制法定まりしにて改事ふれ曲るる家人
と治り國民と交する實なるも故人の恨
多きころは軍陣の時血氣の勇気
にて道正しころは故士卒思ひ候るに
して忠義の傷もよりころは多きといひ思ひ

軍に勝利を得るとは後より必ず敗軍となる
をうらむるに國主の文道は好むといふはかき
し書を多くよこし詩を作り故事と學ぶ
にあらはし誅の道は志す諸事につきて
吟味工夫を委まして萬の事節目は
ちうつもあやまらばなきやうにて善悪が
れし賞罰とびつに何れもゆるきを所要
とほ又武道を好むといふは專ら武を
とてしやいふは軍の
道はよく志し常に乱を志しむる智略は

廻ら〜油断あり士卒と調練して功あり
者も恩賞と與へ罪ある者に刑罰を加へ剛
臆と云ふ〜治世も合戦と忘らざるをいふ
武勇は専ら〜一人は傷た勤るに匹夫の
勇あり國主武將の武を小ぢらるる當家の軍
法は他の術あり〜君臣法令は正して士
卒も一致ありは肝要とて平生無事の財
臣下と安んずん功有者も賞福と惜まら
與へて其志はよく諸人も通〜至時を其
恩給と思ひ付て上下心と令せ一心助む武

勇はけむ故兵力のよき事合ふなり〜
徳利を得る事〜う〜い有る〜は又主將
たる人威〜ふ〜ふ〜は民のおさへ
ふり〜〜悪む心持〜威は〜
ら〜は〜し〜却〜大なる害ある事
あり徳人におぢらるるは身は持たざる
威〜心得家を逢〜威高なる事〜
なき〜詞はあり〜人の徳は関入を
あやまち〜か〜ふ〜ふ〜
に〜は〜時を家を徳といはるる

おのつら身はいく枝も本もくへ家老
さつかくのやくちりこ諸士末こにむるまて
只おちおそゆるもるまてこ忠義の思ひを
なまゝたるく家老のまのこて奉公を
實ぶ整ふるまをくく高慢よく人たるい
うけよきる時い臣下とけま氏うとこ
果て必國を失ふまをくもるまのるれは
心得しき事也誠の威と云い先其方の行爲
正しく理非賞罰のくもるまあるうちく
高ぬりおのやくちりまけとやくも臣下

萬民うやまひおそりて上はあなるとりし

むるまゝておのつら威光備りるま

りるま他ノ九條ハ文學武藝ノ教ニ係ラサルヲ以テ略ス

筑前守齊隆幼年ニテ襲封シ國ニ就キ政ヲ親ラ
スル一能ハス老臣代リテ藩政ヲ執リ天明三年
九月重臣ニ諭告ス其詞ニ曰
今程申切君様久々申滞府に遊一ハ二付
申家中一統相励ミ奉公以助心得る儀ハ
此等相違ハ通シ小然る又諸士中間に耻

を不弁心得遠出来小根元を多く小稽古
事とし不心掛自由に相暮ら故文盲懦弱
道場と不存し事起り中後三流就右
即先代縁以素稽古小可之ら小家
中々風儀を励む思ふに其儀度
交はチ續て大変に付其儀無之小依之此節
右に即遺意を文學曰稽古小兩小に相
違有限画々を初末に迄一表指南小様
儒者没之画々に付依付之る高下共存
寧ろ才西小間々罷出學問修行仕身持即
奉公之道筋と稽古可仕小事

一武藝之儀は修行筋急度出精可仕小
即上之苗字之間々事少く有之候に付
此家中一統心と令學問武藝事一に相励
可申此以後諸士學問武藝精不精急度
以實藝と下有之小百何り其旨相心得修
行可仕右之趣但支配之法は彼勤亦小様
可仕相違小事

天明四年條令ヲ東西ノ藩學ニ揭示ス其文

一忠孝之道と宗と、禮義廉恥と亦、身
持覺悟宜先く相應と、用と相と、其の
子と輩と、其の守と可と事

一原後之面、聖賢の教法相守り學子問不
作法正く指南方懈怠無く其の守と可と事
一禮古之人貴賤に限らず其の守と可と事
其調一果に終り下り出事

右之条、原後之輩、其の守と可と事也
天明四年二月

天明六年七月執政學校師負ニ告テ書生ヲ諭セ
シム其辭ニ云

一學子問と他と禮古事とち、其の守と可と事
少故自然懈怠及、其の守と可と事
其辭ニ奉云、其の守と可と事
少宗教原後之人弱、其の守と可と事
其辭ニ奉云、其の守と可と事

寛政六年大目附ニ令シテ曰
年若く輩專ら學問武藝に心を盡し

居小輩も後後等を行付山も河も懈怠に
相成又一向に中絶に事有る様は五中より小
後用は中間等も後無余儀事は小字等
志を立心敷く居りし中絶に相成りも後
然るに志有るも中絶に形令に拍り
不得止事の中絶に五中より有るは中
此等も後有るも交次も付自然に中絶
と有るも其後にも輩頭没頭も有り
中絶學問も修り筋も五中より相成り
後小輩頭等も面も并組付の頭も不
可なり讀小輩

寛政九年執政ヨリ諸物頭諸役人ニ諭告シテ曰
一法士の畔次男三男以下亦十一男は五中より
東西學問も入つるは十一男の内も七
入つるは後小輩も學問も儒者も後
可なり
合小輩

但入學存立の事居小東西學問も相
隔りも又ハ切ラ虚弱も難
學問も入つる致學問も心得も上

其志之居宅向寧之儒者沒又ハ指南加
勢其外朋友之ヲシテ令也禮古ハ仕ハ後
ハ後ハ子次也ハ成長之上ハ早速學ハ聖
賢出禮古下仕ハ事一

一學問修行仕ハ得ハ武藝ハ相止メ武藝執行
ハ得ハ學問ハ相止メハ有之ハ相聞甚不劫兵
之ハ文武之道ハ法士也ハ是ハ非也勵
不ハハハ不叶後ハ不及ハハハ行出
ハ有之ハ一統子知仕ハ事ハ然ルハ法士ハ子
声拾也學内外ハ武藝禮古ハ法ハ是也

學問ハハ出居ハ事ハ夫ハ相止メハハ
有之ハ相聞ハ也ハ四書五經ハ素讀也ハ人
倫ハ大義統也ハ道ハ余義也ハ不ハ事故
素讀也ハ相止メハ後ハハ曾ハ無ハハ學問ハ
即ハ達也ハ用達也ハ人材出也ハ材ハ後ハ
此世語ハハハ處文武ハ修行心得達仕學問
ハ書生ハ出方素微也ハハ材ハ有之
ハハ何分即ハ為也ハ左ハハハ細支
配ハ事ハハ預也ハ頭ハハ道守也ハ心得方不
ハ真實也ハハハ下ハ事ハハ此處

事を以て加勅并世以後但支配之輩心得遠
子之性之急交下有教導之事

但母子春秋宗旨を改但支配之輩の面
會又ハ其外出會之度右西宗之趣を以
無懈怠可有教導之事

一東西學問の多々勤學懈怠之各付各為心得
大目付が披見し讀み細支配之分ハ書寫を
右之輩の面會之上より吾輩為勤學の性重
きこと加勅戒の若又心得遠之輩も於有之
得る道理を説示し即主之行而の性下は

中法ハ右之通ニ多々以後ハ兎角面法ハ重
要可有教導之事

一各方は用問合と考又ハ即館法未言ハ不
能東西學問の性ハ越書生之輩性古之性
子とし見らる又ハ金弊之性性儒者後世は
其合但支配之輩ハ性又其子弟之とハ各許
とハ存在の性有之ハ精石性有之
ハ然れども性有之ハ別之書生之勵之得り
相成學問の性之性主として而下ハ後之業
事也之為其下有出法ハ右之通各方不絶

東西學問の如くは其儀出の儀は東西學問の儀志
後中より其達玉事の事

一但支配其外子事の事學問の修り以て其
各元は兼て各々元を各付て可也其西會
度と文武の業を懈怠相励つ桂重を以て
下りて其事居る事と云き人物は仕て其上
各諸持前より其心は世に其改めし
人材は出来り其心は各は其多真實を
其心は其心は其主を以て其事
此交主事其物も其心は其情点教道其有る
一塵より其事奉る事

己酉月

又用人 後參政 大目附 後大監察 二諭告ニテ曰

却用人中

學問却引之儀は付各方存寧事の處文武
兩枝其の引之有る度は委細中出之類尤
其事は只今即幼年中は從文の後其家中
一統不其励む不相隔る時其上即
用が其の励む有る事は各々東西學問
其是是出方の上に出方と云其學問

志を勵む一統を引よるまゝに
當此に後亦一各方を考へて
先づ之を用達と爲す爲め
無碍の事、其の上各方を
道勗の志と爲すに於ては
自然と出方以て之を成す
其の爲め、依りて出ると
學問の深況定むる日、内
各々の日、各々の方、合
道徳を以て其の依りて一
其の空日之内、一、二人
又或は之解る方、其の依
未だ之、依りて其の依りて
武藝の家業、其の依りて
各々方、其の依りて、其
原能するに、其の依りて
之、其の依りて、其の依り
各々の方、其の依りて、其
之、其の依りて、其の依り
可成なる事、其の依りて、

道徳を以て其の依りて一

其の依りて、其の依りて、

其の依りて、其の依りて、

其の依りて、其の依りて、

其の依りて、其の依りて、

其の依りて、其の依りて、

其の依りて、其の依りて、

其の依りて、其の依りて、

其の依りて、其の依りて、

其の依りて、其の依りて、

其の依りて、其の依りて、

以而小枝下之可斗小事

己四月

大目付也

毎季東西學問不より勤學之輩之内懈怠
五名后P者之各付抽出ハ各々其頭之
石名付相渡ル何枝之状ニテ懈怠ハ五名后
之類遂以味以書付各とP出ハ枝下ニP
頭之面之各より其當人之家主以下
及后ハ右ハP出次ハ早々其越月
及右ハ各々其越月學問不目付ハ調
付依

七可有之る去ル子年止自五
行又遂食系ハ此以後ハ毎季東西學問不
より勤學之輩之内懈怠之よりハ各付各
五名后五達ハ右名付目及之抽出
見相渡ル上ハ此等頭之別紙
後之書面之
類ニ付右名付頭之抽出ハ
各付ハ其書面之其筆之面會
上之
勤學之輩ニ加教諭之
以原
枝之類各々其頭之抽出ハ
且頭之
面之各々其面會
上之重之ハ其後有
限面之

別々學問精々出人倫之大本統々于大綱也
相弁入而して其用達々心は修りき一なる也
之行出の意を相守り協志せしむるは其の
可なり讀小右之通に於此以後の鬼角面會の重
要なり讀小右之主として其の精下は相心は其
一其を別々の意頭として其達は然る意頭として
轉没の号をいふは太寫一通令々元々も此度
其後其の系頭を没せし上其交々を於又各々
其の意を以て達並々に其計を述い通して其
之軍訓之小核としての意をあらわすは其の事

明治元年

明治元年士族ニ諭告スルノ左ノ如シ蓋學府
今般原犯思ふに文武館即可之ニ其
家中一統文武之稽古相励小核專其以之
を成三十景以下之面として其意として其
計の計を別々志とせしむるは其の意として
多しなり即沙汰として其計の意として三十景
以上之向を文武稽古を免るる年終と心は居
向と有るは其の事不其の意として其意として

士之系其引之之其意之相成之時勢之不亦他
事ニ事寧異論我記之其語之倫安其之小
向之其助之其語之議之上急之其行付次亦
可有之其系重之其語之議之上急之其行付次亦

士族卒ノ子弟教育方法

士族ノ子弟ハ十一歳ニ及ヘハ必學校ニ入シム
十歳以内ト卒及陪臣ハ其意ニ任ス○遊學ハ師
負其人ヲ擇ヒ廳ニ告レハ其費用ヲ給ス明治初
年遊學ノ命ヲ受シ者東京ニ八生鹿兒島六生山

口三生西京静岡熊本佐賀日田各二生也○講義
ハ毎月五日廿一日教授ト訓導一人各一經ヲ講
ス執政參政大監察諸甲長及生徒又士ノ志有者
聽聞ス

平民ノ子弟教育方法

平民及僧侶ハ入學ヲ許サス祠官醫生ハ可ス前
時遠賀鞍手宗像三郡私ニ金ヲ贖シ書ヲ購リ農
民ニ學ヲ勸シニ明和申郡奉行民ノ文學ハ風俗
ヲ害ストテ其書ヲ収テ學校ニ附ス是ヨリ禁不

禁ノ間ニ置ク師負ハ平民ノ俊オアル者入學ヲ
乞ハ廳ニ告ケ可ク得テ許サントス後年ニハ平
民ノ脩學ハ其意ニ任ス

家塾寺子屋設置ノ制度

定制ナシ坊村共ニ師ニ就キ或ハ村ニ招テ書法
數術謠曲ヲ學シメ應分ノ謝金ヲ贈ル師ハ是ヲ
以テ糊口ノ資トス儒書ヲ兼教ルハ稀也スヘテ
郡吏市令ノ干預スル所ニアラス

學校ノ名稱

東ニ設ルヲ東學問替古所ト命ス私ニ替古館ト
稱シ後修猷館ト改ム又東學ト呼フ後年修猷ヲ
公稱トス西ニ置ク西學問替古所ト命ス私ニ甘
棠館ト稱ス又西學ト呼フ後年城内ニ置ク文武
館ト名ツク

校舍所在ノ地名

修猷館ハ郭内大名町ニ在壕ヲ隔テ城ノ正門ニ
對ス甘棠館ハ郭外唐人町ニアリ文武館ハ城内

藩主ノ居館ノ半ヲ割ク所也

沿革要略

藩祖勘解由次官孝高後如水稱スハ亂世ニ在テ明敏

勇武霸王ヲ輔テ百戰一モ蹉跌セシテ無ハ世人

ノ知處ナリ而テ文事ヲ好ミ詠歌ヲ嗜ミ又善ク

臣下ヲ教育ス今其一二事ヲ舉ク嘗テ黒田亀松

後市右衛門景好ト改ムニ書ヲ與フ其文ニ云

予手取祝儀云々十足ニ於上祝儀ト云々

物下取云々此油取云々云々云々

云々云々云々云々云々云々

二月三日

島松友

又老臣母里多兵衛友信朝鮮ニ干役ス其子孫五

郎後左近友生ト改ム家ニ在シニ手簡ヲ與フ

此ノハ多智清書云々油取云々

云々云々云々云々云々云々

云々

三月廿八日 水

母子孫のり及

或人此書ヲ見テ遠征擾攘ノ日尚少年ニ學業ヲ
勤シノ是ヲ獎勵スルニ遠國ノ珍味ヲ以シ且父
ニ進メテ私ニセサラシム七行ノ書原書自中字
ヲ以テ七行
セリニ書一尺ノ鮭ニシテ教戒ノ普徧如斯ト云ヘリ
○孝高ノ子筑前守長政武功ヲ以テ此大國ニ封
セラレ世平ニ及テ儒學ヲ崇尚シ常ニ經子ヲ讀
ム其四書七書皆赤紙ヲ以テ書皮トス故ニ子孫
赤本ト稱シテ寶藏ス江戸ニ在日林道春信時ヲ
郎ニ招キ其論語ノ講義ヲ聽キ講餘ノ談經史ノ
要語ニ及ヘハ筆記セシメ積テ二卷ヲ成シ危言
抄ト題ス又万葉集榮花物語等ノ國書ヲ謄寫セ
シメテ閱ス信時ヲシテ世子右衛門佐忠之ヲ教
導セシメ且藩士ヲシテ就學シム又三宅寄齋島
ヲ聘シテ藩臣ノ師トス故ニ栗山大膳利章管主
水正俊佐谷五郎太夫俊直等文學ヲ以テ稱セラ
ル長政既ニ内外ノ數戰ヲ歷テモ尚武藝ヲ研究
シ足田豊五郎景兼カ劍法稻留伊賀守祐直カ銃
術ノ秘訣ヲ傳受シ強齡ヲ踰テモ尚怠ラサリシ
カハ砲師竹腰山城守劍師富田越後守重政各術

書ヲ獻ス調馬師荒木十左衛門元滿松本五右衛門之成劍師林田左門信太和大守朝勝ニ厚祿ヲ與ヘテ藩士ノ師トス○忠之ノ子右衛門佐光之其子肥前守綱政大ニ文武教師ヲ聘シ藩士ヲ獎勵ス儒學ハ本藩貝原久兵衛篤信竹田助太夫定直鶴原新平韜土佐黑岩慈庵軍師ハ讚岐香西少左衛門成資若狹宮川仁右衛門尚古因幡堀尾市郎兵衛貞典周防美和忠左衛門尹平劍師ハ長門有地四郎右衛門就信肥後柴藤三左衛門美矩秋月安陪總左衛門頼任本藩中村六之丞政信鎗師

ハ江戸伊岐又左衛門榮利豊前高田五兵衛雅深高田新左衛門吉和和泉井上兵左衛門照一本國石川喜兵衛成利射師ハ攝津高津韋右衛門頼春柔術師ハ出雲笠原三郎右衛門雪近砲師ハ長門久佐八郎左衛門豊勝安藝伴嘉右衛門資廣江戸村上伊右衛門吉正等也皆厚祿優待シテ教授セシメケレハ藩士名ヲ揚ケ材ヲ成ス者多シ其餘波他邦ニモ及ヘリ國人酒泉彦太夫弘カ水戸ニ聘セラレ修史總裁トナリ香月貞庵啓益カ儒醫ヲ以テ中津ニ招レ森八郎右衛門尚友井上三太

夫久豊ハ共ニ久留米ニ仕ヘテ鎗師トナリ三上
某モ又鎗術ヲ以テ長府ニ仕ルカ如キ其人也○
篤信ノ門竹田定直ト鶴原韜其高弟也定直ノ子
貞之進定澄其子助吉定倫其弟助太夫定良韜ノ
弟子ニ櫛田平次涉島村宇兵衛遲定澄ノ門人ニ
井土勘吉周道アリ此三家竹田氏ト共ニ世文學
トナル遲カ子宇兵衛皓其弟子安井総吉維允周
道ノ門人ニ真藤宗七世範アリ皆篤信ノ説ヲ奉
ス○綱政ノ孫左近衛少將繼高ノ世子修理太夫
重政文學ヲ好ミ武藝ヲ嗜メリ嘗テ曰學校ハ治
國ノ基本也トテ創建ノ志有シニ襲封ニ及ハス
シテ蚤世ス其屬續ニ及テ宰臣ヲ召見續テ伴讀
竹田定澄ニ永訣ヲ告ク其師儒ヲ重スルト斯ノ
如シ○繼高ノ嗣子筑前守治之學校ヲ興サント
ス亀井魯又建學ノ議ヲ建白セシニ治之卒シテ
成ラス嗣主筑前守治高其志ヲ繼ントセシニ治
國僅一年ニシテ卒ス其嗣筑前守齊隆六歳ニシ
テ襲封シケレハ宰臣黒田美作一庸浦上數馬正
昭大音伊織厚通久野四兵衛一親等藩政ヲ執リ
先君興學ノ美意ヲ成サント定議シ天明三年六

月廿四日儒臣竹田定良龜井魯ヲ召テ先君己未
儒學ノ行レニテヲ慮リ玉ヒシ志ニ随ヒ今度各
ノ居宅ノ近地ニ學問所ヲ設ケ各ヲ其總受持ト
ス士卒ニモ入テ學フヘシト布告シタリ儒負ト
相謀リ教法ヲ正クシテ書生ヲ導ヘシト命ス定
良ハ後日余宅ハ僻地ニシテ子弟ノ往來ニ便ナ
ラサレハ闔藩ノ爲ニ設玉フ意ニ合ハス士ノ學
ハ讀書ニ止ラス文武ヲ併セ學ヘハ便地ニ非レ
ハ志ノ如クナラス懈怠スヘシト告ケレハ宜也
トテ郭内ノ中城ノ正門外ノ地ヲ點定ス魯ハ宅
側ノ地ヲ乞フ即土木ノ功ヲ起シ同四年正月ニ
至リ東西二學共ニ落成ス西學ハ二月朔日東學
ハ二月六日各開館ノ儀ヲ行フ執政諸有司師負
會シ執政教授總受持也職名ノ沿革後ニ詳ニスノミ掲シ孔聖画
像ヲ拜シ畢テ教授講義シ生徒列リ聽ク東學ハ
論語弟子入孝章西學ハ文行忠信章ヲ講ス後毎
年開學東ハ正月八日西ハ十日ヲ以テシ各此章
ヲ講スルヲ例トス○東ハ朱熹ノ說ヲ奉シ西ハ
物雙松ノ說ヲ主トシテ教授ス生徒ハ其居ノ東
西ニ拘ハラス其意ニ随テ入學セシム是ヨリ藩

士學校ニ贄ヲ進メ書ヲ挾ミテ出入シ義理ヲ講
シ古今ニ通スルヲ得タリ○寛政十年二月西
學延燒ニ罹ル再營セスシテ同六月其師負ヲ罷
メ其生徒ハ東學ニ併ス○同年東學ノ隙地ニ武
榭ヲ設ケ毎月朔望參政大監察諸甲長會シテ藩
士師弟ノ劍鎗弓長刀拔刀海螺柔體諸術ノ武藝
及禮儀ヲ視檢ス調馬發砲ハ其場ニ於テス○齊
隆ノ子左近衛少將齊清學政ヲ正シ師儒ヲ重シ
其班ヲ進メ祿ヲ篤シ春秋臨學シテ書生ノ會讀
ヲ聞キカ學ノ生徒ニハ書或ハ金ヲ與テ獎勵ス

○文久三年濱貞彙館材蠹生シテ久ニ堪可カラ
スト聞キ私金ヲ獻シテ新ニ營造セント乞ヒ且
酬賞ヲ辭ス允シテ三月功ヲ起シ明ル元治紀元
正月落成ス○齊清ノ嗣子參議長溥維新ノ際人
材ヲ教成テ天下ノ用ニ供セント欲シ居館ノ半
ヲ割テ學校トシ文武館ト名ヲ命シテ明治元年
六月廿六日開館シ皇學儒學ト諸般ノ武藝ヲ講
習セシム徵臣平山卯八郎能忍其方法ヲ建白ス
又廣ク遊學ノ道ヲ開キ費用ヲ與テ二京ト雄藩
ニ入シメ多ク入塾ヲ許テ其飲食ヲ給シ博ク彼

此ノ書ヲ購ヒ生徒ノ用ニ充ツ修猷館ハ故ノ如クシテ入塾生ト句讀生ヲ誨ヘ三年十二月洋學ヲ添タリ又遠郡ニ學校ヲ置テ其方面ノ士族ニ文武ノ學藝ヲ講習セシム士子弟大ニ進ミ勉強セシカハ七年ヲ經ハ成功ヲ見ント云者多カリキ○三年閏十月文學ハ修猷館ノミニテ講習セシム四年修猷館ノ隣地ニ新ニ演武舎ヲ營築シ併合シテ藩學校ト命シ三月廿八日開學ス七月文武館ヲ廢シテ藩廳ニ併ス十月廢藩ノ詔下リ藩學校永廢シ廿五日師負ヲ罷メラル學校ノ書籍及ヒ前藩主ノ私本ヲ附セシヲ併セテ縣廳ニ附ス○江戸邸學ハ光之ノ代黒岩慈庵ヲ師トシテ在邸ノ子弟ヲ教育セシカ後廢ス天明四年復學舎ト武榭ヲ設ケ村山廣ヲ儒學師トス文政五年再儒負岡部千太夫豊義ヲ師トス後相續シニ元治元年在邸ノ士卒皆本藩ニ還ニ及ヒ廢シテ其師負生徒共ニ修猷館ニ併ス

學校設立ニ盡カセシ人物ノ氏名行事又ハ該校

ニ關係アル著名學士ノ小傳

事業學派
著書等

學校設立ハ前ニ記載スル如ク幼主ノ時宰臣ノ
集議スル所ニシテ今誰カ專為セシヤ知ヘカラ
ス又舊藩ニテ著名ノ學士ト稱スヘキハ數人ニ
過ス今教授副教授及設立ノ日盡カセシト著述
セシ師負ノ履歷ヲ略述スルト左ノ如シ

教授始總受持後
教授又督學

東學

○竹田定良字子俊號梅廬通稱茂兵衛又茂平助
太夫本姓高島氏竹田定直ノ外孫也兄定倫曾竹
田定澄ノ嗣トナリテ子ナシ定良其後ヲ嗣キ世

祿三百石ヲ襲シ納戸組儒者即文學也スベテ職

トナサレ藩主ニ侍講ス又家譜編輯後藩史修撰

ヲ命セラル天明三年建學ノ日總受持ニ任ス後

積勞ヲ賞シ廿石ノ采地ヲ加ヘラル寛政三年總

受持ヲ免シテカヲ家譜ニ專ニセント乞フ允サ

ズ訓導三人ニ其職事ヲ助シメテ優待ス又使番

列ニ進メラル藩主齊隆毎ニ延入テ經ヲ問疑ヲ

質シテ甚崇禮ス八年致仕ヲ乞フ允サスシテ只

其職ヲ免シ尚教導ヲ掌シメ持ニ子ノ定矩ヲ擢

キ代テ總受持トス後建言シテ學政ヲ論シ異說

ヲ闌ク十年六月廿三日終ル年六十一命ヲ奉シ
テ筑前孝子良民傳續篇ヲ著ス

○竹田定矩字子恕號復齊通稱平之丞少年力學
人ニ過絶シ文詩及書ヲ善ス長崎京都ニ遊學シ
西依周行若槻敬等ノ門ニ講學ス寛政八年四月
學問所總受持ニ補シ家譜編輯ヲ兼子納戸組ト
ナシ禄米五十苞ヲ與ヘラル後父ニ嗣テ其世禄
ヲ受ケ十一年七月廿二日終ル年三十一

○竹田定夫字子毅號梧亭通稱助太夫又茂兵衛
定良次子也幼シテ兄定矩ノ後トナリ納戸組ト

ナサル文化五年九月學問所總受持後教家譜編

輯ニ兼補シ後藩主齊清ノ讀書相手後伴讀奥頭

取後副班ニ晋メラレ譜成リ禮服ヲ與テ賞セラ

レ陸士頭班ニ升ル文政十一年累年ノ功勞ヲ賞

シテ二十石ノ采地ヲ加ヘラル天保十一年六月

七日終ル年五十四

○島村彬字子質號儺川通稱孫六秋吉代藏子也

島村遜ノ嗣トナリ文化十年指南本役助後副官ニ

擢レ後嗣父ノ禄ヲ襲シテ指南本役後訓導ニ遷

リ納戸組ニ列セラレ藩主讀書相手ニ命シ總受

持助後副督學ニ遷リ奥頭取班ニ進メラレ天保八年積勞ヲ賞シ米地百石ヲ與ヘラル十一月總受持家譜編輯ニ兼補シ弘化二年六月致仕ヲ乞フ允テ白銀ヲ賜フ終ル年六十九

○竹田定簡字子得號觀瀾通稱簡吉又助太夫定夫ノ嫡子也文化十二年生ル天保十一年八月父ニ嗣キ襲祿シテ總受持納戸組ニ十サレ彬卜職ヲ同シテ且修學セシム十三年六月禊職シテ小性組ニ貶セラル後指南本役ニ補シ弘化三年十二月總受持ニ復シ尋テ家譜編輯ヲ兼シメ後奥頭取班ニ進ミ藩主讀書相手ニ十サレ又陸士頭班ニ陞リ慶應元年五月致仕シ瀟韻卜稱ス今尚存セリ

○榊田駿字千里號北渚通稱駿平始命ヲ受テ江戸ニ入り古賀煜ニ從學シ天保十二年指南加勢見習後副授讀ニ補シ後父ニ嗣キ學問所預後理館事ヲ兼テ指南本役助ヲ歴テ家業本役ニ遷リ納戸組ニ進ミ藩主讀書相手ヲ命セラレ慶應元年五月總受持家譜編輯ヲ兼補シ奥頭取班ニ升リ三年二月罷ラレ明治五年四月四日終ル年五十八所著

朝鮮聞見録續通鑑綱目辨解アリ

○竹田定猗字子斐號謙窓通稱貞之進定夫ノ五男也天保五年兄定簡ノ嗣トナル始カ學ヲ賞セラレ再賞ニハ書籍ヲ以テセラル命ヲ兼テ江戸安積信ニ從學シ父久三年指南本役ニ補シ納戸組ニ列リ罷職シテ慶應元年家ヲ嗣キ側筒頭中軍也銃頭ニ補シ二年正月総受持家譜編輯藩主讀書相手ヲ兼シメ陸士頭ニ準班シ又他藩應接ヲ命セラル明治元年辭職シ六月復職シ明治二年十月再乞テ免職シ今見ニ御笠郡中學校教師タリ

○魚住明誠原名明勗通稱三郎八父ヲ明倫ト云明誠四歳ニテ亡父ノ遺祿ヲ襲シ天保五年指南加勢見習ニ補シ後學費ト書舎ヲ給シテ勤學セシム暫シテ職業ヲ併セテ辭ス又郡代ニ補シ免奉行浦方受持トナリ六年ヲ經テ辭職ス致仕シテ樂慶ト稱ス勤王ノ事ニ連坐シ幽閉セラル一三年明治二年擢テ文學教授兼伴讀トナシ儀カヲ獻シテ賀正セシメ其實ハ前人ノ陸士頭班ニ同シ毎年米五十苞ヲ給ス十一月奥頭取ニ轉シ公子傳役ヲ兼子旗奉行ノ次ニ班セシム又構頭分後内ヲ兼家扶

シム三年六月命シテ曰累年勤王ノ意厚ク寛ニ
罹ルト雖志節不變ヲ嘉シ終身毎年米十五苞ヲ
與フ四年正月判任一等ヲ以テ藩政ニ參預セシ
ム三月太政官^卿福岡藩權大參事ノ宣下ヲ拜ス
九月改革ニ依テ免官ス八年二月二日終ル年六
十七

○長野誠字叔達一名一誠通稱和平芳齋弦軒其
號也月形質第三子文化五年生レ族人長野一興
ノ嗣トナル年甫十一襲祿シ後十六職ヲ歴任シ
明治二年執政局議事三等官ニ至リ二職ヲ兼子

十一月文學教授ニ補シ五職ヲ兼子四年四月致
仕ス又孝睦ノ行及文武ニ學ヲ以テ教授スルト
書籍ヲ獻スルノ譽職務勵精スルノ賞ニテ賜物
ヲ受ル^ト八回終ニ明治三年六月永世百石ヲ賜
フ告老ノ後又三職ヲ兼補セシメラレ置縣ニ及
ヒ必屬ヲ拜シ二職ニ任シ教部省ニ召テ香椎宮
權宮司兼中講義ニ任セラレ縣廳ヨリ又二職ヲ
兼シメラル六年七月乞テ本兼官ヲ免シ今十六
年尚生存ス仕途ニ在ル^ト前後五十六年他人ノ
如ク履歷ヲ縷述スレハ數葉ヲ費スヲ以テ略叙

ス所著皇國閱史筌蹄皇國立懦芳踪香椎考御巫
祭神集說福岡啓藩志筑前藝文考筑前志士行狀
福岡名家小傳福岡近世年表趨庭記譚等凡ソ二
百餘卷稿ヲ脱セサル書數カラス

副教授

始職名ナシ他藩ノ助教ナリ後副督學ト命ス

○島村遜字子讓始名常號泮林通稱宇兵衛又字
八皓ノ子也父ニ嗣キ儒者トナリ建學ノ時教導
ヲ命セラレ後藩主讀書相手ヲ兼子シメ納戸組
ニ進ム天明七年勤勞ヲ嘉シ白銀ヲ授ラル寛政
三年周徳弘道ト輪流シテ定良ノ職掌ヲ助ケシ

ム五年カ學善誨ヲ賞シ毎年祿外ニ米十五苞ヲ
給セラル六年六月周徳弘道ト番代シテ総受持
ノ職掌ヲ攝セシメ家譜編輯ヲ兼シム享和三年
攝職ニ勞スルニ酬ヒ祿ヲ加ヘ獨総受持ノ事ヲ
行シム文化九年累年ノ勵精ヲ褒テ祿米九十苞
ヲ賜フ十年家譜成シテ賞シテ禮服ヲ授ラル後
致仕ヲ乞フ允サス優待シテ子彬ヲ擢テ職ニ就
シム十三年三月老ヲ告シニ金ヲ賜テ允サル十
四年終ル年六十七

○井土周徳字子好始名周利號南山通稱佐太夫

本姓竹森氏井土周道ノ嗣トナリ儒者役ト十サ
レ藩主齊隆讀書相手納戸組トナリ江戸ニ留
五年歸藩シテ學館教導此時儒者ハ別ニヲ命セ
職名ヲ命セスラレ寛政三年輪流シテ總受持ノ助
タラシメ且藩主ニ侍講セシム十一年六月輪流シテ總受持
ノ事ヲ攝セシム十二年八月十三日終ル年五十
三

○奥山弘道字君美號審軒通稱卯藏正好二男也
少年安井維允ノ門ニ入テ學フ天明元年擢レテ
家譜編輯手傳後藩史
編修ニ十サル三年特ニ禄ヲ與

ヘ儒者トシ學館教導ヲ命セラル後秋月藩主伴
讀ヲ兼シメ積勞ヲ賞シ禄ヲ加ヘラレ又金ヲ與
ヘテ手傳ヲ免セラル寛政三年納戸組トナシ藩
主讀書相手ヲ兼シメ又輪流シテ總受持ノ助タ
ラシメ五年學ニ優ニ教ヲ勤ルヲ嘉シ禄外ニ毎
年米二十苞ヲ給セラル十一年六月周德遜ト番
代シテ總受持ノ職事ヲ攝セシメ家譜編輯ヲ兼
シム享和元年攝職ヲ能勤ムルヲ賞シ白金ヲ賜
フ二年九月六日終ル年五十六
○竹田定琮字器甫號榛齋通稱貞之進定矩嫡子

也叔父定夫ノ嗣子トナリ備後ノ管晋帥ニ從學
シ東下シテ古賀樸ノ門ニ入ル文化十三年八月
擢レテ總受持助納戸組ト為サレ父ノ東行スル
ヤ總受持家譜編輯ノ事ヲ攝セシメラル文政四
年十月禡職セラレ後指南本役ニ補シ九年四月
總受持助ニ遷シ年給米三十苞ヲ與ヘラル十一
年二月十九日終ル年三十八

○井土周磐字鴻漸初名誠慤學圃古谷鋸溪皆其
號通稱佐助又佐市喜多岡元賢第二子也井土周
徳ノ後トナリ儒者ノ業ヲ嗣キ文化三年指南本
役助ニ補ス後學職ヲ勤メ儒業ニ篤キヲ賞シ每
年祿外ニ米二十苞ヲ給ス十年命ヲ受テ秋月藩
主ニ伴讀シ後納戸組ニ進ミ十一年藩主讀書相
手ヲ命セラレ十四年積勞ヲ賞シテ祿ヲ加ヘラ
ル文政二年十二月總受持助タラシム四年禡職
セララル天保八年學問所家業本役即訓導也ニ復セラ
ル嘉永四年致仕ヲ乞フ允シテ衣物ヲ賜ヒ學務
故ノ如クナラシメ毎年白銀ヲ賜フ再稚ト更稱
ス文久二年六月二日終ル年八十一所著大日本
正史約皇朝廻瀾錄綱目朝鮮兩役記事本末筑前

地志存疑土産考補遺筑前名勝志略孝子正助傳
烈女阿正傳論語方言俚講大學俚講小學方言講
義擬小學外篇清律俗字解康濟錄國字解買櫝雜
話和學杜撰客囊小記屯倉論武藤少貳考菊池寂
阿公二墓論在京見聞錄對馬紀聞艷崎記行東郡
記行墨法集要解水風藻玉霞集アリ

○早川愿字子侗始名德隣通稱又一郎祖父德榮
父德聚相嗣キ長沼宗敬ノ兵法ヲ傳ヘテ藩士ヲ
教授ス愿又其傳ヲ受タリ文化七年指南加勢見
習ニ補シ久シカラスシテ辭ス文政三年指南加

勢トナリ後本役助ヲ歷テ本役ニ補シ納戸組ニ
進ミ藩主讀書相手ニ十サレ弘化二年家譜編輯
受持ヲ兼子學問所総受持助トナリ後奥頭取ニ
準班セラレ累年ノ勞ヲ賞シ金ヲ賜ヒ又禮服ヲ
授ラル安政三年七月致仕シ不及ト稱ス六年七
月四日終ル年六十九

○渡邊方字士部通稱豊吉又小右衛門江戸小田
氏子也入テ渡邊小助ノ嗣トナル始力學ヲ賞シ
テ小學ヲ賜フ給仕番トナサレ文政十年郎學指
南加勢見習ニ補シ指南加勢ニ遷ル天保六年職

務ヲ勤メ善書生ヲ導キ旁ラ武藝ヲ修シ養父母
ニ孝事スルヲ賞シテ禮服ヲ授ラル後指南本役
助ヲ歷テ本役トナリ藩主讀書相手ヲ兼シメ納
戸組ニ進メ後其職ヲ勤ルヲ嘉シ三石ヲ増シ又
積勞ヲ賞シテ祿一石一口俸ヲ加ヘラル明治三
年三月教官ニ改メ十月副督學前時ノ總受トナリ
サレ特ニ五等ニ陞セラル四年學校廢ス金ヲ賜
テ罷ラレ尋テ致仕シ詠歸ト稱シ十年二月廿四
日終ル年六十七

○宮本茂任字子任原名繁信號竹墩通稱啓之進

又權ハ父茂朗茂任文政五年生ル弘化四年指南
加勢トナリ指南本役助ヲ歷テ本役ニ遷ル命ヲ
奉シテ江戸ニ至リ安積信ニ從學シ後藩世子讀
書相手ヲ兼納戸組ニ進メラレ勵精ヲ嘉シテ禮
服ヲ賜フ又宰府寄寓縉紳護衛諸藩士ニ應接ヲ
命シ且幕使ニ接伴セシメラル慶應三年右筆頭
取用掛後執政局議事ニ轉シ明年指南本役納戸組ニ復
シ伴讀ヲ兼子後教官ニ改メ學優ナルヲ以テ特
ニ五等教官相當ハ六等也ニ升セラル四年八月副督學助
ニ命セラレ學校廢スルニ及ヒ金ヲ賜テ罷ラル

今現ニ福岡中學校教師タリ所著初學文軌記事
文例作文獨學等アリ又宗盛年ト修身初訓吉田
利行ト漢文讀本新撰叢語ヲ同撰ス皆童蒙ニ便
ス

○正木昌陽字子歆號章齋通稱善太夫重光二男
也文政十年生ル嘉永元年勤學ノ賞ヲ受ケ同年
指南加勢見習ニ補シ指南加勢指南本役助ヲ歷
テ本役ニ遷ル明治三年賞シテ六累年職務勵精
公私ノ生徒ヲ教育スルヲ篤ク老母ニ孝事ス殊
勝ノ至也故ニ禮服ヲ賜フト同年命シテ東京ニ
遊學シ朝廷諸藩ノ學政ヲ訪聽シ在郎ノ隊士ヲ
教誨セシメラルル四年歸國セシニ八月副督學助
ニ命セラルル九月乞テ免職ス後祠官及權禰且ト
ナリ再祠官ニ補シ辭シテ今教育ヲ專ニス

興學ニ功アリシト著名著書ノ人

○真藤世範字叔度號峨眉通稱宗七柴田源藏ノ
子也士族真藤常章ノ嗣トナリ其馬醫ノ業ヲツ
グ井土周道ニ學ヒ上進スルヲ以テ儒者ニ轉セ
ラレ興學ノ日教導ヲ掌ラシメラルル安井儀ヲ汲

引シ且學職ニ列ル者多ク其門ニ出ルヲ以テ世
人稱シテ東學第一ノ功臣トス後學問所預ヲ兼
子又秋月藩主ニ伴讀セシメラル勞ヲ積ヲ賞シ
テ祿ヲ加ヘラレ寛政三年老ヲ告ケ漁樵ト稱シ
文化八年三月二日終ル年八十二

○安井儀字民則通稱三藏金龍盖山ハ其號也父
維允文學ヲ以テ名アリ儀家庭及長野一徳ニ學
ヒ父ノ祿ヲ襲シ右筆ニ補シ再賞ヲ受テ後辭職
ス允シテ學ヲ修メシメテ儒者役ト為サレ書物
預ヲ兼子シム天明二年建言ス三年學^制建ツ其教

ヲ掌ラシメラル當時儒貞或ハ時勢ニ通セス儀
獨嘗テ政廳ニ在テ故實世務ヲ知ル故ニ克教授
ヲ輔翼シ有司ニ應酬シテ學制ヲ成ス學規棟梁
父皆其子ニ出ツ六年優學善教ヲ賞シテ納戸組
ニ進メ祿外ニ毎年米二十苞ヲ與ヘラル後秋月
藩主伴讀ヲ兼シメ寛政二年江戸邸ニ祇役シ藩
主齊隆讀書相手トサレ四年勞ニ酬ヒテ金ヲ
賜ヒ尋テ奥頭取ニ轉シ廩祿米九十苞ヲ與ヘラ
ル在職ノ日幼主ヲ輔導シ忠直ヲ以テ稱セラ
ル主逝シテ久シカラスシテ辭職シ九年十二月六

日終ル年五十六所著祭儀學則金龍遺稿アリ

○花房正慶字子斐後名正恒字積善號雷嶽通稱
傳藏又藤九郎山中幸祥第四子也花房正範ノ養
子トナル島村皓ヲ師事シ天明四年指南加勢ト
ナリ後家譜編輯手傳ニ轉シ文化十年其書成リ
加祿シテ其勞ヲ賞セラル尋テ致仕セシニ同年
起シテ指南本役ニ補セラレ文政五年七十歳辭
職ス允シテ金ヲ賜フ渡了ト改稱ス八十三歳藩
主長溥遺老ヲ崇禮シ月形質ト同ク召テ講書セ
シメ衣物ヲ賜フ九十歳詩ヲ徵ス因テ外套及ニ
醜ヲ授ラル天保十五年九月廿一日終年九十三
易善ニ至リ尚周易ヲ手ニス所著三個條廣義水
原若宮縁起アリ

○月形質字君璞原名潤號鷓窠通稱市平又七助
父有禧世士族料理人タリ質其職ヲ嗣ク幼年真
藤世範ニ學ヒ又竹田定良ノ門ニ入ル天明四年
指南加勢トナサレ後世業ヲ儒者ニ轉セラル七
年勵精ヲ賞シ祿ヲ加ヘラル京都ニ遊學シ西依
周行若槻敬鈴木温ニ問學ス後學優ナルヲ嘉シ
納戸組ニ進メラレ享和二年奥頭取班ニ陞セ藩

主齊清讀書相手トナシ後藩政ノ顧問ニ供セラ
レ積勞ヲ賞シ祿米九十苞ヲ與ヘ又秋月藩主ニ
伴讀セシメラル文化十二年伴讀シテ累年勤勉
セシヲ嘉シ百石ノ米地ヲ賜フ十四年顯官ニ遷
サント徵書ヲ下ス病ヲ稱シテ應セス即罷職セ
ラル文政二年致仕シ鷓栖ト稱ス先勞ニ酬ヒ三
口俸ヲ以テ養老ノ資トセラル年八十六病ニ卧
ス猶中庸九經章ヲ譯解シ詩三首ヲ併セテ藩主
長溥ニ獻ス嘉納シテ短襖ヲ授ケ且其病ヲ憂ヘ
朝鮮人參ヲ賜ヘ臣愈ヘスシテ終ル時ニ天保十

三年十二月六日也所著山園雜興鷓窠集有

○臼杵鎮匡字子慎又子順號溪村通稱辰之進鑑
古第二子也幼齡學ヲ嗜ミ孜々研究ス藩主嘉シ
テ每年米十苞ヲ與ヘテ學資トス寛政四年擢テ
儒者トシ廩祿米十二石ト三口月俸ヲ賜フ長崎
京都ニ遊學ス八年指南本役ニ補シ後納戸組ニ
進メラル文化九年學職ヲ勉勵シ父ニ事ヘテ孝
養篤至スルヲ賞シ祿一石一口俸ヲ增加セラル
文化十年三月二日終ル年四十二著書數部其嗣
子鎮寧不肖ヲ以テ家ト共ニ亡フ只先儒姓名録

存ス

○吉田全字士德一名庸行號磐谷通稱源助庸興子也寛政八年指南加勢見習ニ補シ起テ儒者役助ニ為サレ指南本役トナリ納戸ニ轉シ藩主讀書相手ヲ兼子シニ本役ニ復セラレ後職掌勤勉ヲ賞シテ金ヲ賜ヒ又禄外ニ毎年米十五苞ヲ給セラル病テ辭職セシニ允サス暇ヲ賜テ攝養セシム文政十年五月三日終年五十二没後其積勞ト文學起群ヲ賞シ嗣子庸時襲禄ノ日禄二石ヲ加ヘラル元警備考ヲ著ス

○宗盛年字子侗號斥鷃通稱佐一郎中村吉矩長子也文政七年生ル宗盛政ノ嗣トナリ嘉永六年指南加勢見習ニ補セラレ指南加勢指南本役助ヲ歷テ贊生館儒學指南ヲ兼子指南本役ニ晋メラレ奉命シテ秋月藩教授ニ轉シ其藩主ノ伴讀ヲ兼ヌ禮待シテ贈遺ヲ厚クセラル歸藩シテ教官ニ補シ秋月ノ勞ヲ嘉シ衣物ヲ賜フ學校廢シテ罷ム後縣廳司法屬ニ補セラル免シテ今現ニ福岡師範學校教師タリ所著國史略摘解又宮本茂任ト修身初訓ヲ同撰ス

○臼井容胤原名匡胤茗圃茶亭皆其號通稱謙次郎又淺夫遠賀郡茶屋原産也父忠兵衛世農ナリシニ容胤八九歳龜吉ト稱ス既ニ善書ノ名アリ又屬文賦詩ニ長ス父携ヘテ上國ニ趣キ其書ヲ賣リ後人ニ託ス本藩郡奉行金ヲ出テ招還シ巨室學費ヲ與ヘ儒學ヲ專カセシム父久三年擢テ禄米ヲ與ヘ指南加勢役班トシ士籍ニ列セラレ長崎ニ往テ洋學ヲ修セシメ後指南本役助ニ補ス明治元年貢士ニ進メラレ後公務人助役又公議人助役ニ轉シ二年東京ニ上リ公用人助役ヲ

兼子シメ班ヲ升セ禄外米七十苞ヲ與ヘラルル八月待詔局ヨリ命シテ待詔ニ候セシメ僅ニシテ免セラレ三年歸藩シ衣物ヲ賜テ原職ヲ免セラレ又藩學校副教官ニ補シ四年辭シテ後書記撰出仕命セラレ後十一等ニ進ミ免セラレ縣廳ヨリ本縣地理圖誌編輯ニ命セラルル明年國史編輯兼掌セシメ十四等出仕ヲ拜シ又學務課兼地誌編輯ニ命セラルル九年乞テ出仕ヲ免ス十年客年西海騷擾ニ際シ職務勉勵セシヲ賞シ金ヲ賜フ十二年福岡縣十六等出仕ニ補シ第五課圖書科

命セラルル同年徵サレテ司法省十五等出仕ニ補
シ翻譯課詰トナリ十三年元老院六等書記生ニ
轉シ國憲取調掛命セラレ後五等ニ進ミ十五年
六月十四日終ル年五十三所著福岡縣地誌略有
其他ハ稿ヲ脱セス

○福井直行字子方號佩韋齋通稱南八又掬中行
ノ長子也天保九年生ル始銃手タリ藩廷其勤學
ヲ嘉シ資金ヲ賜ヒ遊學セシメ上進ノ後舉テ士
籍ニ列子句讀師ニ補シ副訓導ニ遷ス藩學廢シ
テ罷ム今現ニ穗波郡中學校教師タリ所著新撰
論說文初學文編等有又宮本茂任ト修身讀本ヲ
同撰ス

右皆貝原篤信門流ニテ朱熹ノ說ヲ主トシ孔
子ノ教ヲ學ヒシ人也師兼ヲ録セサルハ學校
ニ學ヒシ也

西學

教授

○龜井魯字道載號南冥通稱道哉又主水父鑿世
醫タリ年甫十五肥前釋大潮ニ從學ヒ登ク才學

ヲ以テ鳴ル安永七年擢テ儒者トシ醫ヲ兼シメ
十五口俸ヲ賜ヒ又納戸組ニ列セラレ天明三年
六月西學問所總受持トナサル七年教育ニ積勞
スルヲ賞シテ禄米百五十苞ヲ賜フ寛政四年七
月失行ヲ以テ褫職收禄セラレ子ノ昱ニ原禄十
五口俸ヲ與ヘラル魯晚年老悖シ火ヲ居室ニ放
テ没ス時ニ文化十一年三月二日歳七十二也所
著語由左傳講義決々餘響南遊記行奇觀録金印
辨半夜話服忌令釋義矢音艸素書獨斷南冥問答
南冥遺稿有

瓊浦草(天明)

○江上源字伯華號苓洲通稱源藏肥後天草ノ産
父ヲ太郎兵衛ト云源筑前ニ来リ亀井魯ニ從學
ヒシニ天明四年藩主徵テ儒者トシ學校ノ生徒
ヲ教導セシメラレ即訓積勞ヲ嘉シテ銀ヲ賜フ
寛政四年七月總受持ニ補シ納戸組ニ晋メラル
後勵精ヲ褒テ白金章服又禄外ニ毎年廩米三十
苞ヲ與ヘラル十年西學廢シテ罷職且儒業ヲ免
セラル文化六年致仕シ文政三年七月七日終ル
年六十三所著大學講義成章閣謾草アリ

著名著書ノ人

莊子預說
老子考

擊裳歌詩
東遊賦

經傳大要
逸史抄
夏小正廣說
孟子考

○龜井昱字元鳳昭陽空石天山皆其號也通稱昱

太郎魯ノ長子也父ニ嗣シノ儒者トナシ學校生

徒ヲ教導セシメラル寬政十年罷職且儒業ヲ免

セラレ父政二年致仕シ天保七年五月十七日終

年六十四力學起絶著述宏富蒙史管公略傳尚

書考毛詩考古序翼周易借考語由述旨大學考中

庸考孝經考左傳續考國語考莊子預說家學小言

峰山日記蟻子防海微言成國治要護文談護文談

廣疏徬逝錄病間漫筆昭陽文集等ヲ著ス峰山小說峰山五記

○青木興勝字定遠一名万字季方號五龍山人通

稱次右衛門百野嘉内子也青木武兵衛ノ養子ト

ナリ天明七年西學問所指南加勢ニ補シ學廢シ

テ罷ム後買物奉行ニ為サレ長崎ニ祇役シ蘭書

ヲ譯官ニ學フ寬政十二年職ヲ免シ蘭學師トナ

シ禄外ニ米十苞ヲ與ヘラル本國蟬行ノ書ヲ讀

ハ此人ヲ始トス文化元年心疾ヲ病ミ辭禄ス養

子ニ其禄ヲ繼シム是ヨリ遠村ニ閑居シ九年六

月終ル年五十一所著答問十策蠻人白狀解南海

紀聞有

右ハ物雙松ノ説ヲ主トシ孔子ノ教ヲ學シ人

也

郎學

○村山廣字子業通稱新兵衛又一右衛門林則一
第二子也士族料理人村山盛文ノ養子トナリ明
和七年其職禄ヲ襲シ安永五年儒者ニ轉セラレ
天明四年郎學建ニ及テ父子其教導ノ命ヲ受ケ
納戸ニ進ミ構頭取ニ遷リ儒業ヲ免セラレ文化
五年七月八日終ル年七十二子緯

○緯字伯經號芝塢通稱大次又新左衛門一从明
和八年料理人トナサレ給仕番ニ轉シ後父ト同
ク教職トナリ尋テ納戸ニ遷リ藩主讀書相手ト
ナル寛政四年儒業ヲ免シテ奥頭取ニ遷シ特ニ
禄米九十苞ヲ賜フ後免職シ又鎗奉行ニ補シ使
番ニ轉シ藩主書師ヲ兼子構頭分ニ遷リ文化四
年積勞ヲ賞シ百石ノ米地ヲ授ケ後三十石ヲ加
ヘラル文政元年致仕シ退齋ト稱シ三年八月十
八日終ル年六十三少年學士林信徵ノ門ニ入り
又平澤元凱ニ學フ所著皇朝編年要録室町紀略
名義備考清三朝實録採要清朝事略飛耳一奇霞

關文集等有

總裁監學

○濱貞彛字希卿號新泉通稱新兵衛又兵太夫貞僚長子也幼年ヨリ力學シテ賞譽ヲ受ケ長シテ備後管晋帥ニ從學ス其資ヲ賜フ文政二年父ノ禄ヲ襲シ指南加勢ニ補シ指南本役見習本役助ヲ歷テ本役ニ陞リ後納戸組ニ列リ藩主讀書相手ヲ兼子シメ又總受持助ヲ命セラル奥頭取班ニ進ミ奥頭取ニ遷リ天保四年積勞ヲ賞シテ百石ノ采地ヲ賜ヒ七年二月學問所總裁ニ任シ武藝ヲ兼掌ラシメ大目附ニ準班セシメラレ讀書相手ハ故ノ如シ十年八月辭職ス後町奉行ニ補シ取締用受持徒罪及撫育受持ヲ兼子大目附ニ準班セラル又家中救助受持刑法受持ヲ兼シメ安政六年賞シテ三十石ノ采地ヲ增加ス罪囚減少セシヲ褒シテ章服ヲ與ヘラル文久三年私金ヲ獻シテ藩學ヲ再營ス自其事ヲ掌リ其酬ヲ辭シテ受ス前後致仕ヲ乞フ三回皆優命シテ允サレス奉職既ニ五十年元治元年復乞フ六月允シ

テ五口俸ヲ與ヘテ養老ノ資トス辭シテ奉還ス
一年俸ヲ収テ他年ハ數ノ如ク給セラル是ヨリ
三嶺ト更ム明治十年十二月十二日終ル年八十
五

○戸川正章通稱佐五左衛門號古硯堂正壽ノ長
子也世業料理人頭ヲ嗣ク始武藝ヲ勵精スルヲ
賞シテ再金ヲ賜フ後永倉奉行又周旋方町方詮
議懸ヲ兼シメラル幾ナラスシテ辭ス慶應元年
姦徒ニ同意シタリトテ禁錮セラレ嗣子ニ世祿
ヲ賜フ三年ヲ歴テ赦サレ瓢ト改ム目附ニ補シ

國事懸ヲ兼子鎗奉行ニ轉ス明治元年文武館建
ニ及ヒ閏四月文武引立受持トナシ調練引立受
持ヲ兼シメ祿米百苞ヲ賜フ後職名ヲ監學ト改
メ五十苞ヲ増加シ賀正ニ儀カヲ獻スルヲ命セ
ラル二年昨春艱難ノ際勵精シタリトテ外套ヲ
與ヘラレ三年三月福岡藩權少參事拜命シ藩學
校ヲ主宰ス六月命シテ曰勤王ノ志厚ク先年寛
ニ罹ト雖志節變セサリシヲ嘉シ終身毎年米三
十苞ヲ與フ四年三月免官尋テ藩知事家扶ト十
リ暫シテ罷メ五年十一月十六日終ル年五十四

所著鎮西新劔譜有

教則

○和學

古語拾遺

皇朝史略 或國史略

大祓詞

出雲神賀詞

古事記

日本書紀

令義解

延喜式祝詞

萬葉集

大日本史

右或ハ教師講義シ或ハ生徒疑難ヲ質問シテ

通曉シ旁ヲ和文歌ヲ學フ他ノ國史歌集ハ生

徒ノ意ニ任セテ師負其問ニ應ス○建學ノ日

修猷館ニハ藩祖ノ略譜本國ノ地志及王代一

覽將軍家譜等ヲ童生ニ讀シメント定ム後ハ

只藩譜ヲ會讀ス必課業ト為ルニハ非ス

○漢學

左ノ十二書講堂ニテ句讀師其句讀ヲ童生ニ

授クレハ記シテ退キ西寮ニテ温習シ授讀其

記否ヲ試ミテ止ム

四書

孝經

五經

小學

近思錄

後孝經春秋禮記近思錄ヲ省ク

右ノ句讀畢レハ南廂ニ移シテ左ノ書ヲ讀シ
メ旁ヲ詩ヲ賦シ文ヲ作ラシメテ教官釐正ス
小學

右教官其文理ヲ口授シ生徒退キ熟讀シテ疑
難ハ質問シ大義ニ通シテ後春秋ニ應試ス

史記 前漢書

右生徒自讀シ通セサル處アレハ質問ス

右卒業スレハ中寮ニ移シテ左ノ書ヲ讀シム

中寮ハ通シテ土圭間ト稱ス

四書 詩 書

右生徒自讀質問シテ應試ス

後漢書 十八史略 元明史略

通鑑綱目 左氏傳 國語 十六近思錄 三士

孔子家語 資治通鑑等

右随意ニ讀ミ質問ス其卒業ニ拘ハラズ學進

メハ北寮ニ移シ經ハ周易禮記ヲ始メ史ハ三

國志已下文ハ八家文抄八家文讀本等ヲ博覽

セシメ文詩ヲ專學セシム○後年ハ左ノ書ヲ

先トシ讀ム

靖獻遺言 日本外史

○凡テ句讀ハ卯時ニ始メ質問ハ辰時ニ始メ共ニ申時ニ畢ル○正月十六日開學シ十二月十四日卒業ス○毎月十日ハ文會廿五日詩會又前二記ス五日廿一日講義ト朔望ヲ併セテ六日ハ讀問ヲ止ム○二日十七日午後生徒四書ノ中一經ヲ會讀ス訓導判者授讀問者トナリ教授其座ニ臨ミ參政大監察諸士長會ス○七日十七日午後詩書或ハ左氏傳等ヲ會讀ス○十六歲以上三十歲已下ノ者ハ貴賤士卒ニ拘ハラズ一回必百日ヲ限リ次第ヲ以テ文武館ノ塾ニ入シメ文學武藝ヲ講習セシメ且藩境ノ警備ニ充ツ○童生ハ春秋ニ一回三十生三十日ヲ限リ修猷館ニ寄寓シ文學ヲ講習セシム是ヲ籠替古ト稱ス○又生質直諒ニシテ文學上達スヘキ者四十名ヲ擇ヒ滿二年修猷館ニ入塾講習セシム右三舍ノ生徒ハ公財ヲ用テ其飲食ヲ給ス詳ニ後ニ記ス

學科學規及諸則

和學

漢學

共ニ文武修猷二館ニテ學習

ス

洋學

修猷館ニ於テス

醫學漢洋

采真館ニ於テス

算法

劍術

鎗術

抜刀術

長刀術

柔術

體術

及杖捕ノ二術

右ハ文武館ニ於テス他ハ學校ニテ教授セス

馬術

城外ノ調馬埒

大砲

郭西ノ海濱

游泳

城下ノ近海

筆道

習禮

兵學

弓術

小銃

螺術

右ハ各其師ノ宅ニ於テ講習ス

文武館ヲ興サシル前ハ一年一回參政大監察諸

士長會シテ各師弟ノ講義演習ヲ驗視ス兵學習

禮ハ修猷館ノ講堂劔鎗弓長刀抜刀柔體螺ノ諸

術ハ修猷館ノ武榭ニ於テシ馬砲游泳ハ各其場

ニ於テス是ヲ見分ト云○士族ノ子弟ハ必文武

二學ヲ兼習セシメ致仕ヲ乞フニハ其嗣子ノ各

師姓名ト傳書或ハ許可ヲ得ル有レハ併セ書シ

テ上ラシメ監察諸官其品行學藝ヲ推問シテ後

父ノ祿ヲ襲セシム○文學武術ノ比例及一科ヲ

專修スルヲ許シ又退學ノ期限ナシ入學ハ前ニ
記スルカ如シ○試験ノ法文學句讀生ハ月終ニ
學得シ章句ヲ温讀セシメ詳ナレハ白文ヲ讀シ
メ又詳ナレハ上等トシ次ヲ中等下等ニ分チテ
其姓名ヲ掲ク是ヲ月跡操ト云四書ハ七月三經
ハ五月續テ上等ナレハ入校ノ次序ニ係ラス即
時師ニ就テ學フヲ許ス是ヲ出懸替古ト云○四
書三經各句讀畢レハ秋冬其生ヲ一舍ニ會セシ
メ句讀師就テ其温讀ヲ聞キ失誤ナキニ至テ教
授試験シ其甲乙ヲ次第シ其姓名ヲ講堂ニ掲ク
是ヲ下考ト稱ス童生ハ大跡操ト云○書生小學
等ヲ熟讀シテ應試ス是ヲ中考ト稱ス又四書詩
書ノ應試ヲ中上考ト稱ス皆教授其中ノ三四章
ヲ講セシメ問答シテ其詳略ヲ分チ甲乙ニ科第
シ其姓名ヲ掲ク上考ハ策論等詩ハ五七律ヲ試
ム文化中師負當今大憂ヲ問野田一本字士立通
稱勳之丞王室衰微ト對策スルカ如キ其一也○毎年質問
生ハ百日句讀生ハ百五十日已上勤學セシト又
試ニ應セシハ日數ニ係ラス開講ノ日執政賞シ
テ藩主ニ告ク其姓名ハ講堂ニ揭示ス○賞譽ハ

文學武藝共ニ師其力學上進ヲ告レハ監察諸官
ニ推問セシメ其實告状ニ合テ後差等ニ随ヒ禮
服或ハ書籍金銀ヲ與フ○罰ハ學校ハ生徒規則
ヲ守ラサレハ入學ヲ謝絶シ悔悟スレハ許ス凡
テ士ノ品行正シカラス學藝ヲ怠廢スレハ輕ハ
言ヲ以テ戒メ或ハ祿ヲ減シ往來ヲ禁シ只學習
上墓ヲ許ス是ヲ大休ト稱ス子弟ハ襲祿ヲ禁ス
是ヲ相續不成ト稱ス謹慎奮勵シテ學藝ヲ勤ム
レハ舊ニ復ス○學校ニ入學スル者ハ紹双ヲ以
テ乞ヒ禮服シテ入ル司儀習禮セシム教授モ禮
服シテ講堂ニ座シ師負列坐ス入學生筆ニ枝ヲ
贊トシテ謁見ス教授學習ノ法則ハ學規ヲ見得
ヘシト命ス生拜シ又師負ヲ拜ス司儀引テ退キ
西寮ニテ學規ヲ讀聞シム出テ教授ノ宅ニ詣リ
謝ス

修猷館學規

維天明癸卯年夏六月公命有司建學館府東西以
造國子弟臣良兼之儒曹教授東館謹與同寮共議
學規伏惟藩祖道卜公有大勲勞於天下享封有茲
大邦于戈始戢經理頻繁乃汲々焉迎羅山林學士
藩邸執經問道日昃弗倦觀其親勸世子學莫非尊
典實抑浮華者其崇尚聖學如此然時屬草創未遑
及庠序之事迨至宗真公遭海內又安國家間暇政
刑既明聲教方興勸賢與能帶來輔翼陶而鼓舞之

於是乎有若貝夫子作於其間以篤實之資兼純正
之學上邇洙泗下窮濂洛閱覽博物獨步關西而其
兼上之德意贊揚風教造就英髦煦濡漸靡有不
盡其材是以文化盛行乎當時雋傑之才質行之士
炳蔚乎不讓中土而國初淳樸之風賴以不渝亦不
翅文翁於蜀也先生嘗建議欲興泮宮益贊鴻猷偶
有故事寢不行齋志以沒爾耒六十有餘年矣雖則
明良繼起乎上才俊輩出乎下亦唯時之未至庠學
之議隨起隨止卒未有能建明者而講學之徒亦漸
陵夷幾乎不振紹靖公即位數年明德益崇政理益
修乃議建學立師以厲風化事未成而薨矣道俊公
繼立好學重儒士民喁喁期望其克纂令緒而下車
僅三閱月遽然棄群臣矣今候幼冲襲封恭默養正
大臣共和勵精為治戰々兢々唯辱寄託之重是懼
於是相與議請兼先君之志立學館府下以宣揚邦
教率勵國子冀獲英俊於當時保風俗於無窮廼有
今命云嗚呼方貝先生時上有明君下多賢才而其
所以誇掖獎成之道亦如彼其至也然而庠序之設
未及舉行歷數十年之久將興輒廢者數矣而後乃
今觀茲盛典於戲何其幸也但時益澆漓儒風不振

而良等蹇劣能薄材謏曾不能負荷世業以繼先生之志何以能矜式國中師表多士育才造德以稱公上之盛意哉雖然幸有先生遺訓在其立教導士之法可得觀焉譬諸聖經而不謬施諸當世而不悖其言近其旨遠矯流弊而歸諸淳古凡為師為弟子者由是進于道焉何患乎其不至邪詩曰雖無老成人尚有典刑不其然乎是以良等相與議請于朝推本先生之意以定學規因擇先生之言最切要者附諸卷末若夫遠念先公世々崇學之盛近體大臣憂國之忠而式先生之猷訓惟日孜孜進德修業深有得乎先王之道以共邦家他日之用則諸君之事也諸君之責也諸君其勉旃

一凡在學諸生當以孝弟忠信禮義廉耻為本必先親師樂群養成忠厚之心以為他日之用敢有非孝弟蔑禮義詐偽苟賤簡慢師友狎侮聖人之言者備加戒喻不悛則請罷之

一諸生須要容貌肅整辭令順從居處正靜步履安詳溫恭謙遜而專心勤業毋得動作無儀言咲猥雜若驕傲凌物誹謗爭狠及遊戲怠惰而不事事

一諸生服飾只質素而潔淨不得好華麗若故服垢弊

一童子輩須服勤尊長事謹應對兼使令不得敢自倨
傲安逸

一凡子弟始入學盛服持謁從訓導見教授受誨授業
尤當慎禮節

一諸生每日辰而入申而散其早畢課程者聽即出如
有故課程未畢而出者具狀請于師員

一諸生出入學館必須謁師員其入者必持名刺毋得
私自出入

一諸生已就師授句讀退而復讀二十遍如有故不能
終遍數者以告師員或有他業願欲且往受業畢便

還至復讀如法者聽之

一諸生授句讀者須要審四聲正訓譯聲氣靜肅無作
唔呶反復貫習以至成誦毋有貪多求速讀聲噉急
看字草率以致遺忘

一凡讀書者要端坐肅容專心看字母得目視東西手
弄他物

一凡初學生員所讀書自有定式須就師稟授毋得任
意妄覽

一凡會讀書者要須正其訓義別其章句詳其文義辨
其事理有疑輒問有得必相質虛已受人毋耻下問

其相接也恭敬遜讓毋好爭勝其論事也反復辨詰
毋憚激切其說事也簡要明達毋有叢雜支離四子
六經主新註兼用古註左氏春秋主杜註至于他書
皆從其本註逐一講究平心精察至如文理有所不
通意義有所可疑則參引他說商量以就義正可矣
若夫厭棄古傳師心好異者嚴加禁遏

一諸生輪次講書要論說詳明而義理通暢毋得曲說
強辯及肆氣鄙俗其聽講者有所疑輒問決毋得隱
默及訐以為直

一諸生座班隨其爵高卑一準朝著

一諸生群居見有過失者須丁寧戒諭不聽則告諸師
員毋得不先相規輒告訐及為之掩匿不發以重其
過惡至不可救

一凡師員有過失諸生當進規毋有所隱

一學須以講明義理為主記誦詞章訓詁之業皆所以
資之非以為主也

一凡為學者毋有志淫好僻妄慕尚華風以違時制悖
國俗

總十九條

竹田定良

島村 常
真藤世範
安井 儀
奥山弘道

修猷館學規譯文

天明三年癸卯六月上、學問所を御下東西
より之を御家中より子弟と仕之小枝に任付小
取人少に付米田茂兵衛係學問所取立人持
より任付同役、令並子問小作法更互達小枝に
任付小昔長政公莫太より御武切を以て御大國
御拜領より後小御兵亂振り辭まり此取替り言
事繁多し小此於江戸林道、去先生を毎こ
御指し本經書講読に字を御人之道と云得

其來の故即自身忠之公に學問を以て勸むるに
抑越えを以て考ふに根柢實儀之所を以て其
本厚善なる儀を以て抑は其を思ふに相見か
然る長政公聖人の教を以て敬ふに其事
を以て下を察ふに即入四砌其事繁時其に
學校に即沙汰を以て未不及に光之公其代に
りて天下を平らして其國を以て其事
調ひ事なり即家中に法士を以て其
こと小疵を以て其用を以て其
又即其を以て其世話を以て其故即家中一統
を以て其勸むる儀を以て其
時又學びて貝原益軒先生其問に修り有る
博覽多識當時に類せらるるに其偏に上を以て
故に其を以て又益軒上を以て其意を以て
學問の教を以て廣めりし子弟を以て其故
家中に人オ多し其來學士者も多く相見か
るに益軒先生學校仕を以て其志有るに上
其事を以て興行下有旨即評議を以て其由に
次第有る其事相止志を以て不遂して一生
終らぬ其夫を以て己未六十一年其來其問

上より即明志をなすに即家老も段々起らせらる
下より學者も居り小治せし只一時首未至らぬ故
學校に即沙汰折首を起しり原も少くともや
お止ぬるもきと即評議も其の治之に即
家督已後迄に即政事に別々心をこめり學子
校政可之に即家中之風俗を先例下り思
ふに即評議も其處其事未成就不仕内
即逝去る迄に治高公即相續り孫に學問を好む
成小に即先代之思を承るに継わ行るに皆
之を仕進し下有るを其法に即行小即
下國學程即逝去る迄に小治處極其初子に其遺
領也拜領も其即政事は一切に家老中其名
代は其初小に格別之精を以て勸養に以て教ふ
心を以て即知君極を護之其大國を治り小
を以て即文藝を厚しめらるるに其先
より其より即評議有る小に其世間之風俗を治り
即家中之面も其子孫に其士の風俗を忘れ恥
を不在事問も有るに平生に其悟も不空小其
即後像等も其行付る人柄掃底も有るに
成来小に偏に學問之道に其意を専ら其教

廣くも故に小治之公思ふを以て文継世を學問
此を印楮下とて法士中初用仕とて一處
風俗を改むる事とて印用達とて事とて出
未印四風水を交相成りて一同に印金縁相
決殿極むる事同小治何の通に何の世に治學
問ふ事可き事小治法志を以て子知の通に治學益
軒先きの時上にも以て志を以て天下に賢才
之人多し印家中に治學の功に格別よ有るは
儀に治學を學校に可き事とて事に至る事小治十子
の久しきを以て歴て其の事北有る事とてやうに相
止り小治も毎交する事小治とて今日も治學加極
に治學なる事治學とて事小治とて事小治とて事
と事小治初つれも不才とて治學力存る事小治大
治の師に能く扶持を仕る事小治上にも治學
意に相叶ふ事治學中にも力及ぶ事治學に治入る
仕合に治學を併せて益軒先きの遺訓有る事
學問に治學を教方にも大意相見ふ事治學とて事
治學とて事治學益軒の授を相守る事治學に治
みく事治學の治學とて事治學とて事治學とて事

先成人ありて之を尚典刑ありてハ母事ハ右ニ
付母事何りしハ益軒先生ハ其意を推テ學
規を定メ其間ハ其通ニ行ケハ其方ハ先聖
以來聖人之道ヲ承ルカ別テ治之公以來學問
之世話多ク即教意と文又世中即家老中
各別ニ即國風之俗ニ心算有テ教を勅亦有テ
益軒先生之指ニ隨ハ初學ハ其初聖人之大道ヲ
學ビ浮テ上ニ其用達ニ其俗之法意ニ文持
前ニハ心算不來ルニ即能ク行ハ上ハ其
道ニ立テ下リ其心算此ハ其相心算修リ下有
之ハ事

學規

一 稽古ニ衆中 孝弟忠信禮義廉恥ヲ根本
トシ 第一師弟ニ親厚ク相門ニ交睦ニ眞實
手厚キ心算ヲ養フニ育テ後日即用之ニ基
下ニ其小自然親兄ノ粗末有テ禮義ヲ薄
薄リ節ニ其意地むキ其儀ヲ執行ハ師友ヲ
輕シテ聖人之即詞ヲ侮ルハ族有テ其意
異見ヲ其(其)意學ニ其於下上ニ其指南
ハ其事

一 禱吉く衆中 形儀正交物言おとろくま
まの居る日の内静りよめ 柔和謙信と
宗として専一に勤學下有く小主居振舞形
儀正しさを早分る事とや或は人と推さ
— 無神と可成い并又極い極い 禱吉又立
自由は事 堅令禁制事

一 禱吉く衆中 衣服身より四つう道具他分
質素ふるり— 質素物もき或は異物を好
つ— ころ事

一 童よ西へ共人并子長く人の用事— を
つより下穿し使いと下より大人並小心洋るり
り交事

一 入門より麻上下着用各札持余下有る事
一 禱吉く衆中 毎朝五つ時より 夜出七時切に
可うより小丸半く 禱吉より仕出か夜は後
引可うより小若次第有く定く勤學不怠内
引可く交存か夜は其譯師役より洋と上る
引可くより小事

一 禱吉く衆中 毎日出方より名札持余り有る
は夜出小若と引可く若く必師役より 面福

は試の事

一素読の習文の上別問を於て遍読二十遍を
其跡に前日習文の所を加へ又一二遍讀下
るべし

一若し據次第有く定て通遍讀不ぬ事
其況下は遠小且又武藝に志す者先
右袖の古又罷越歸り又々學問所より出定
て通了遍讀仕ふ事人々孫子次第了る事

一素讀に依り字音たりし讀書之趣靜く讀
遍讀誦讀を問ふ何れも定て是れ不枝讀るべし
一時又早く仕込な存讀せしむ粗駭
失念に及らばる事

一物一讀書に之を去るべき容観し
心を專一にして文字を能見下るべし
眼目を
讀るに手越しぬ事

一初心に衆中讀る書ハ定式を主とす
後日其守讀る事ハ國字の書寫の内
初心に於て其本振る事ハ亦
初に於て

一會讀を字音字訓を以て文句を擧げ

訳を弁一小事 肝要のみ疑ふべき不き不き
相尋自分又見付たる處も他より習ふも
ありし相互に譲りて字を好むる事あり
愈縁を造つて互に随分言遠く論争可有
又意を説くは詞繁うして法分り小枝
有る交事一四書五經ハ新説を主として
古説を兼用いたす杜撰を主として他書も
皆其本注を主として先注に通ふことあり
其上小枝しき所有る他説を可用の可有
全讀ハ古説不吟味して自分ハ説を主として
乃妻小事

一 輪講之衆も亦説を以て義理悟るる
法列ハ小事 肝要ハ言辭之説新言ハ説
并ニ妙しき詞ヲ其ノ事
一 祐古之衆度序段式之通抄
一 相門之中過有るを見聞ハ誤つた互ニ異
見を以て若穂入等ハ師後下りて違ハ
相對ノ異見をもつて悪事を披露し又
覆ひ傳へたるあつたを增長したる事あり
事

一師没る面々状方新心に依るる一かつ袖ひきき
窓中より味つて存言うとらひり小遣りては
りて少事

一西の學問の義理を講しゆめかるといふ事や状
事いふ書務と詩書と詩文をゆく字義訓詁
なと吟味状のまはり義理を亦りて為したるけ
と状より依るいふ詩文をゆく書とらみそへ訓詁
を吟味状のまはり學問のまはり心得り
さる事

一偏僻を好み國俗を度りまう唐りきたる事
をいひてりりる事

以上十九條

甘棠館學規

教授官龜井魯撰

一建教授官一人掌總領學事樹風教育才造士以贊

邦治

語稱溫故禮戒記問為人師之難也故總明威重博
學多識行為世表能率服其屬蓋股肱之用鼓舞士
俗贊揚治化者獨可任教授余學淺質闇固非其任
惟兼時乏奉命不諱幾為負乘獨願後進士有學行
優著者而出于其際余將執鞭從之

一建訓導師三人掌誘進學者督課勤惰講道說經以隆學化

凡學者尊卑異事利鈍殊性故教法一定不活而用之恐泥焉故孔子之進求於由則否故其謂老彭仲傀曰政之教大夫官之教士技之教庶人揚則抑抑則揚綴以德行不任以言故古善教人者微言博喻相觀而善之不凌節而施之使人感憤進取欲己不能以繼其志以盡其材乃訓導之期也故學識通明才德優重恩信接物以夾輔教授而後始得稱職

一建句讀師五人掌勸勉幼學講授句讀論藝辨義以

進課業

凡年少子弟血氣未定進退無常六廢四失於是乎出故教者必知之導而弗牽開而弗達使其和易勉強而終其業也故精考訓詁以慎其傳博通名義以待其問諦察性行以施其教誠其言也約而達其譬也近而明無牽矇之累而有輔仁之益可謂善教矣是故教人者其學之也博其思之也審其行之也篤大學之教教而後知困知困而後能自強說命曰敷學半諸師勉旃

一建課業目十二條一曰講說二曰會讀三曰輪講四

曰獨看五曰作文附會六曰作詩附會七曰習書八
曰習算九曰教制十曰教兵十一曰幼儀十二曰試
業

右科目十二皆取以厲策初學使其自強進取之術
也講說者教授先生或訓導師口陳古籍詳辨章句
訓誥使學者集聽受其義也但官人君子先經禮事
業庶人幼學先義訓德行蓋大學官先事士先志之
意也講主要容貌靖恭教諭明暢使聽矜式信受也聽
衆戒坐班差池起居雜沓或回瞻廣咳擾聒旁聽也
會讀者會集學者共就一書講究其義也其式訓導

師一人設几坐上頭執列名版與所講之書逐名按
章聽其講義以墨批圈於每名下以記勝負就會衆
中擇取一人發難起問是名問者問者發問會衆取
次各以其所見對對訖問者判其得失判定而後訓
導逐名批圈之若會衆不允受其判則與問者相論
報窮詰乃止若兩義未定或雖究詰猶有餘義則訓
導乃從容教諭得典故精覈意義明白而後始判勝
負又會衆或發難問者通之則訓導為判其得失判
定批圈如初講畢訓導乃安名版几上數其批圈改
次會衆席單以定重會坐班圈多為勝批多為負圈

最多者進為問者稱為奪席之榮若三會不奪席升等與諸師相齒論語曰君子無所爭今會讀設勝負之式爭奪其席於義似失雖然中古有校讎之名謂兩本相覆校如仇讎也可見講書之難雖夏人猶如是而況我東人子乎年少惡負人情之常也其惟惡負是以求勝其惟求勝是以自奮奮斯勤勤斯進進斯樂樂斯久久斯化既化而不覺其脩自未不可禦也此之謂教之術矣孔子謂射為君子之爭以其不怨勝者而求正於己也余於會讀也取之此外亦多式今不盡舉之輪講者輪次學者口說其嘗所講習之書也其義有二一欲其反覆貫習以饜飮于中也一驗其得失以督責往日怠惰也獨看者經史子集暨本朝諸帙從其所欲涉獵之就館質問其義也作文者自述文辭也其文記序贊銘及簡牘譯文惟從訓導所命述之成則錄呈訓導請其是正訓導稱善則質諸教授先生文會者限日期會學生探題作文也成後質正如初作詩式一與作文同詩亦文之一體宜不分科目然自三百篇以至唐律絕其體屢變今而後自是一體故別為一科習書者擇善書者教作字之法也今未得其人故姑闕之但於古法帖中

取其所好時習之為可習筭者擇善筭者教乘除歸約之法也今闕教制者擇精典章者教法度刑政之制也今闕教兵者擇精兵制者教攻守操練之法也今闕幼儀者教童幼以定省視膳及洒掃應對進退之節也今闕以上四科雖皆未得其人而其書備存參考研精自致之亦足矣試業者就學生所習之業驗其工程也或問經史疑義以視其識或問世道汗隆以視其機或問時政急務以視其能或問富國強兵之術以視其略或問治亂興廢之勢以視其才或問貧富廉耻之誼以視其節或問親子忠愛之情以視其仁或問死生義烈之行以視其誠或問怪異幽明之故以視其博或問陰陽災變之理以視其達或賢主名臣之績暴君汙吏之行以辨其所好尚或國家之禍福農賈之利病以論其所由然或軍旅攻守之法和夏何故殊宜或葬祭厚薄之制古今何以異情若夫聖學之歸老墨之要及儒佛巫醫之際大凡其業之所不可不辨明通知者先期抽出分錄小紙以糊緘封盛在巾箱中至期與試學生皆就位于館而後教授至命學生就巾箱中採取所錄既學生復位對几端坐援筆書對不許敢移席相話說其書對

不必限漢文國字但文辨簡明義理穩字者為佳試
業之式不止于此今略之古大學有視學之法三年
一視禮甚恭重蓋天子之禮也故曰未卜禘不視學
今惟勸勉學者故以月代年庶幾以督促工程也

一教導學者之式雖大法已定而臨時消息應機進退
一任其師意所欲為雖教授不得恣掣肘

一凡人士新未入學教授受謁授業署姓名入學簿但
卿大夫時未聽講監視學事不及之雖僧侶農賈具
禮容未請則署名如上但不得同簿

一凡學者就館受教坐班高下隨其爵尊卑一準朝著
但會讀分耦順序者不在此限其受句讀質疑滯者
自辰至申不必限早晚而不許遲留移晷空談妨勤
其獨者作文作詩等不在此限

一館門以卯上刻開以申下刻闔若有不得已之故不
時開之告故教授取其管鑰不具禮容及異邦人不
稟命教授者不許入廂內

一藏書有掌書生掌其出納若有乞覽者稟于教授借
之雖訓導不得犯之已卒業返上亦稟而收之不許
遲延踰月携去出門

一器財有公吏一人掌之如有取用告故教授乃出用

之用訖照數收納但常用如書案烟具類不必告請如致毀損請官不過時補之雖教授不得以供私用一館之庭階舍之几席日命僮人洒掃拂拭之不許器物紛糝埃塵汗穢

一置入學簿以記學者姓名及入學時日若有故罷退削之

一置著述簿以記學者所作詩文已歷教授許可者旁注其作時日詩錄全編文惟題識

一置課業簿日記學者講業每月一改之驗勤惰以視進退

一置器財簿以記一切所有書籍什器若有故增減并記其所以增減之故

一禁履屐乱著畫壁破柱支躓失容驕傲犯位

夫學者事必敬行必脩要容止端正舉動整飾矣履屐乱著不可謂整畫壁破柱不可謂飾走躓失容不可謂端驕傲犯位不可謂正詩曰敬慎威儀是民之則學生胡不翼々爾

一禁酗酒狂呼談及淫褻

酒能令歡不必不飲亦能敗和飲宜有量孔子曰不為酒困古人飲酒礼以防淫猶或踰之今無之宜敗

和也學記曰燕朋逆師燕辟廢學可不戒乎

一禁觸犯國禁易侮家諱

入國問禁入家問諱古之禮也凡年少容氣望遠志高者動輒謂大功不顧細謹大節不拘小節而虛夸跳梁犯禁入罪觸諱取禍不復顧如何是大禮如何是大功此謂之棄暴之民也書曰不慎細行終累大德可不思乎

一禁議彈時政謗誅大人

周武鉗金人南雍復白圭君子之慎言也自古豪傑士辯駁政事不避忌諱詭言覈論以自取咎為不鮮矣惟君子周身之防其防禍之門如是所以守死善道也雖然議政論人將以資於他日者也故其善政偉行適可以感發人意厲飾躬行而不涉忌諱者不在此禁詩曰好言自口莠言自口可不慎乎

一禁幼者凌長者長者侮幼

夫幼凌長者犯上之歸也長侮幼者虐下之歸也下虐上犯亂之道也故古大學之禮養老序齒莫大焉所以教孝弟通倫理也今俗異宜禮亦幾亡非可得而行况施諸鄉校乎爰建此禁冀守為典則莫苟犯之除會讀之外無敢得論爭加凌焉互相遜讓誇掖

以長其善寬譬輒諭以救其失教學相濟才德並進
入事父母以此出事上長以此則俗雖異乎同禮雖
亡乎猶存庶幾足以奉格物致知之意焉爾

職名及俸祿

○學校總裁 一人

○監學 一人 前年ハ總裁ヲ置キ後ハ監

學ヲ設ク共ニ文學武藝ノ教ヲ管轄ス監學

ハ文武師ノ管轄及學財ヲ掌ルノミ總裁ニ

異ナリ○俸祿ハ大監察ニ準班スレハ五百

石ヲ給ス

○教授 一人 或ニ人

始學問所總受持ト

命ス學校ニテハ教授ト稱ス後文學教授ト

命シ又藩學校督學ト改ム○世祿ノ外ニ米

十苞或ハ八苞ヲ給ス是ヲ役料ト云奥頭取
ニ準スレハ二百石ヲ與ヘ陸士頭班又賀正
儀刀ヲ獻スルヲ命スレハ三百石給ス

○凡學政ハ執政ノ中一人藩士教育ヲ專掌シ參
政其事ヲ輔助ス參政モ其中二人ノミニテ掌リ
シ時モアリ大監察教員ヲ管轄シ其勤惰ヲ視察
ス

職負概數

○訓導 六人 始職名ヲ命セス只儒者ト

稱シ後指南本役ト命ス學校ニテ私ニ訓導
ト稱ス後公ニ訓導ト命シ又教官ト改ム始
東學ハ四人西學ハ三人東西ヲ併合シテ後
六人トス○世禄外ニ米八苞ヲ給ス役料ト
云功勞有テ十苞或ハ三十苞ヲ給ス是ヲ合
カ米ト云後百五十石ヲ給シ又禄二十石ト
六口月俸ニ更ヘ後百石ヲ給ス是ヲ當高ト
云世禄ニ増加シテ其數ニ充ル也

○副訓導 十一人 始儒者役助又指南本役
助後副教官ト改ム始一人後増シテ十二人

ニ至リ一人ヲ減シテ十一人トシ内二人ヲ以テ和學師トス○始ハ世禄外別給ナシ中百石ヲ給シ後禄十七石五口月俸ヲ給ス

○句讀師

十人

始指南加勢役學校ニテハ

私ニ句讀師ト稱ス後句讀師ト命シ又授讀

ト改命ス始東學ハ六人又九人西學ハ五人

又八人東西併セテ後或ハ増テ十二人或ハ

減シテ十人トシ又十二人トス終二十人ヲ

定負トシ八人ハ司寮司儀司書ヲ分テ兼子

二人ヲ和學師トス○始ハ禄外ノ給ナシ後

○又百石ヲ給シ又禄十七石五口月俸ニ改ム

○副句讀師

八人

天明八年始テ置ク始指南

加勢見習後副句讀師又副授讀ト改命ス東

學ハ始三人又六人西學ハ始一人後六人東

西合併後七人又増テ十二人ニ至リ減シテ

八人ト定ム

○試業生

無定負或ハ十二人又十八人始番

助ト稱ス書生ノ學進ミシヲ擇ヒ銀ヲ與ヘ

講習ヲ專ニシ旁句讀師ノ當直ヲ助テ童生

ニ句讀ヲ授ク

○理館事 一人 始學問所預或ハ師負一人
又都講三人ニテ兼又 已上ハ士也

○屬吏 五人 始手附又帳附即書手ニテ
始ハ東西共ニ三人卒也

○小使 十一人 始ハ四人下卒也
右明治四年三月人負也

○學問所目附 二人 寛政二年始テ置東西學
師弟ノ勤惰ヲ監察スルヲ掌ラシム後武藝

○替古目附ヲ兼又天保七年廢ス
○文武目附 六人 天保七年始テ置キ文學武

○藝師弟ノ勤惰ヲ監察スルヲ掌ル後減シテ
二人トシ安政四年廢シテ其職掌ヲ目附役
ニ併ス

文武館

○權少參事 監學 一人 始三人文武引立受
持ト命ス後一人トナシ監學ト改メ班ヲ進
メ又權少參事ニ其職ヲ任セシム

○大屬 四人 始三人手傳ト命ス監學ヲ
輔ク

○少屬

○試補

○屬吏

始名手附九人

右文武館ハ記簿皆散失シテ詳細ヲ知ニ由
ナシ

生徒概數

修猷館

○建學ノ年束脩ヲ行フ者六百餘生

○後年日ニ未學フ者二百生餘

○在塾生四十名 内 都講三人 典簿二人

講武点檢二人 掌饌三人

右一生一月ニ米一斗六升五合金三步二朱

ヲ以テ食料トス

○寓館童生三十名 毎年春秋ノ内三十日ヲ限

寓宿シテ學習ス副訓導二人モ宿シテ教導

ス其三十二人皆食ヲ給ス

文武館

○日毎ニ入學フ生徒五六百名

○在塾生 百五十名

右一生日ニ米七合ト白梅醃菜ヲ給ス三八
ノ日ハ味噌汁ヲ添ヘ朝望ハ酒魚ヲ加フ

束脩謝儀ノ有無

束脩ハ只筆二枝ヲ呈ス毎年ノ開講モ又筆二枝
ヲ贄トス其他ノ謝儀ナシ

學校經費

今記載散亡シテ詳知ニ由ナシ只文化十三年ハ
銀貳貫目米百苞ヲ定額トシ明治初年ハ米六七
百苞金八九百圓ヲ用ユト断簡ニ存ス師負ノ給
與造營ノ費用等ハ此外也○學田及學費ヲ藩士
ニ賦課スルノ類ナシ學費ハ悉皆藩財ヲ用ユ

藩主臨校

藩主春秋ヲ以テ臨校シ書生經書ノ會讀スルヲ
聽ク又居館ニテ經史ノ應試或ハ會讀ヲ聽ク執
政參政大監察諸士長師負會ス畢テ師弟ヲ賞ス
ルモ有又詩文ヲ徵テ其能否ヲ觀ル

祭儀

聖廟ノ設釋奠ノ儀ナシ只正月開講ノ日聖像ヲ
掲ケ師負生徒拜スル而已

學校構造

文武館ハ廢毀シ修猷館ハ改作シテ觀ヲ改ム故
ニ其坪數等詳ニ知ヘカラス今其略圖ニ鋪ヲ添

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目次及藏書種類部數

學校出版翻刻ノ書ナシニ館ニ儲ヘシ万卷餘ノ
藏書ハ目次ヲ併セテ縣廳ニ附ス故ニ種類部數
共ニ知ヘカラス

家塾寺子屋

家塾寺子屋ハ私立ニテ郡吏市令ノ關係スル所
ニ非ス或ハ設ケ或ハ廢シテ定則ナシ今其遺法
ヲ求ムルニ途ナシ

附録

舊領内一般學事ニ係ル舊記類其他事ノ苟モ學事
ニ涉リ右編史ノ資料及參考ニ供スヘキモノ

太宰府學校

舊領内御笠郡觀世音寺村ノ西ノ端ニ學業院ノ
址アリ方十五間計ノ地ニテ村民ハガツキヤウ
ト稱ス江家次第曰吉備大臣入唐持弘文館之画
像来朝安置太宰府學業院大臣又命百濟畫師奉
圖彼本置大學寮 貝原篤信ノ地志ニ學業院ハ
吉備公始テ立玉フト云吉備公ハ天平勝寶六年

ニ太宰大貳ニ任セラル然レハ此時創立シ給ヒ
シヤ延喜式ニ見エタル太宰府ニハ先聖先師閔
子騫三座ヲ祭ルト見エタリ即此所ニテ祭ケル
ナラシトアリ按スルニ學業院ノ名國史ニ見エ
ス只江次第ノミ故ニ其始末考フヘカラス令曰
太宰府博士一人 掌教授經業 義解曰謂教
管國學生 授課
試學生 集解曰謂
諸國學生 是ヲ見レハ令ヲ選ヒ玉ヒシ大
寶已前既ニ太宰府ニハ學校ヲ置レシ也校無ハ
何所ニテ學生ヲ教育センヤ然ラハ學校ノ設置
ハ上古ニテ既ニ學業院ト命シ玉ヒシヤ又地志

ノ説ノ如ク吉備公別ニ創立アリテ學業院ト名
ツケラレシヤ考ワルニ由ナシ又加藤一純慶長
五年ノ頃那珂郡ニ學業村アリ今ハ其村名亡ヒ
テ同郡麦野村ノ支邑ニガキ、ヤウ有是學業ノ
轉訛ニシテ古時學業院ノ資用ニ充ラレシ地ナ
ルベシト云ヘリ令ヲ按スルニ大學寮博士太宰
府博士共ニ一人ニテ掌教授經業課試學生ト有
テ職掌全ク同シ但位ニ貴賤ノ差アルノミ太宰
府ハ萬葉集ニ遠乃朝廷ト書シ續日本紀ニ太宰
府人物殷繁天下之一都會也子弟之從學者稍衆

三代實錄ニ鎮西者是朕之外朝也ト見エタル重
鎮ナリ延喜式ニ諸國釋奠式釋奠二座先聖文宣
王先師顏子太宰府者先聖先師閔子騫三座トア
リ然レハ筑前國學ハ別ニテ此府ニ大學ニ准セ
ル學校ヲ設タマヒ彼學令ニ國學生得第者進補
大學生トアレトモ府ノ所管九國二島ハ京師ニ
遐遠ナルヲ以テ大學生ニ進補スヘキ者ヲ此府
學ニテ教課有シカ當時諸國ニ無比ノ學校ト謂
ヘシ又地志ノ學業院ヲ記セシ中ニ學業絶工聖
像モ失セ只其址ノミ殘リテ農夫ノ宅トナレリ

トアリ是元祿年ニ記スル處也文政中博多ノ商

奥村保全

一名源字淵伯稱源之丞
居中島町號烟草屋

其故址ニ聖廟

ヲ營ミ學校ヲ置ント志ヲ發シ心カラ勞シテ病
ヲ成スニ至ル家人憂テ醫師ニ託シテ止レモ肯
ンセス曰余先年病ヲ憂ヘ孔子ニ祈リテ平愈シ
タレハ其賽ヲ為サバルベキヤトテ既ニ巨石ヲ
聚メ鈿柱ヲ製セシニ成ラヌシテ死ス叔太宰府
神庫ノ書籍器物ノ中ニ古ヨリ三銅像混入シタ
リ相傳フ是彼吉備公將來ノ孔子顏回閔損也ト
嘉永中夜須郡朝日村平山保成稱平十郎此像ノ
為大庄屋

塵埃ニ埋晦スルヲ慨ミ私財ヲ以テ龕ヲ製シテ
納メ且宮司大鳥居信全ニ謀リ管廟ノ側ニ聖廟
學校ヲ營築シ三像ヲ置ント議定セシニ包辨募
金ヲ私スルノミナラス終ニ三像ヲ典物トスル
ニ至ル明治初年宰府栗原知弘稱松屋孫兵衛
逆旅主人也金
ヲ募リ賠還シテ故ノ如ク神庫ニ納メタリ後世
孔子ヲ畫クハ皆冕冠衮衣繡裳也是王者ノ服ニ
シテ魯大夫タリシ孔子ノ衣冠ニ非ルト童學生
トイヘ氏知ルヘシ斯畫ハ唐書ニ開元二十七年
八月追謚孔子為文宣王南向坐被王者之服トア

ルニ依テ也今此神庫所藏ヲ見ルニ實ニ古色掬
スヘシ三像共ニ立テ衣裳垂帶納屨シ皆劍ヲ佩
ヘリ孔像ハ高八寸四步右手掌ヲ下ニシ左手掌
ヲ上ニシテ合セ頭ニハ後世ノ巾ノ如キ物ヲ蒙
シム是緇布冠カニ像ハ顔閔ヲ分辨スルト能ハ
ス一像ハ高六寸六步袖中ニテ拱手スルニ似タ
リ一像ハ高六寸八步拱シテ右手指ヲ露セリニ
像共ニ前ヲ見ルニ科頭ノ如シト雖熟視スルニ
詩都人士ニ緇撮註ニ其制小僅可撮其髻也ト云
ヘル物ナラン神護景雲二年崇孔子用文宣王謚

ノ敕有シニ先ナル物ニテ千餘年前ノ漢製タル
一知ヘシ江次第ニ記セシ吉備公將來ハ画像ト
見ユ是トハ別ナル一明ケシ銅像画像共ニ公ノ
將來ト確傳アリヤ江次第ニ記セシハ即此銅像
ト云ハ信スヘカラス公ノ歸朝ハ彼カ追王ノ後
ナレハ王服ニ改シ画像ナランカ

名島學校

逸史曰筑前侯隆景常慨喪亂之久人不知學乃摹
下毛足利學規于名島治所設庠舍建聖廟行釋菜之

禮使大夫士庶入學親臨勸勉焉吏民觀聽靡然成
風云コノ名島ハ舊領内糟屋郡ニテ隆景ノ城址
存ス往々其圖ヲ藏ムル者アリ重臣ノ宅舍祠寺
等ヲモ悉ク録スレト學校ハ見エヌ數篇ノ筑前
地志共ニ名島城址ヲ記スル一詳ナレト學校ニ
及ハス其他毛利家記等隆景ノ嘉言善行ヲ記セ
ト學校設立ノ一ナシ只日本外史ノミ逸史ニ同
シ水戸ノ史學ニ精博ナルハ天下ノ知ル所也其
藩臣青山延光ノ小早川隆景傳ハ出典ヲ註シテ
詳悉ナリ而ノ興學ノ盛舉ヲ載セス故ニ其遺址

ヲ求ムルニ由ナシ貝原篤信云隆景備後ノ三原
ニ隱居セラレシ後慶長元年足利ノ學校玄修軒
ヲ招キ孔子堂ヲ建學問所ヲ造リ若キ輩ニ勤學
セシメラルト是モ確據ヲ知ラストイヘ氏是十
ラシカ

